藤原 章司*1 高橋 圭子*2

Preparation of perbenzyl-cyclo-(1, 6)-α-glucopyranosides

Shoji Fujiwara^{*1} Keiko Takahashi^{*2}

Cyclodextrans (CIs) are naturally occurring α -(1,6)-linked cyclic isomaltooligosaccharides, consisting of seven to seventeen glucopyranosyl residues. Three secondary hydroxy groups are situated on one of the edges of the ring, whereas no hydroxy group is placed on the other edge. Treatment with benzyl bromide and NaH in DMF gave perbenzyl-O-cycloisoheptaose (Bn₂₁CI-7), octaose (Bn₂₄CI-8), and nonaose (Bn₂₇CI-9) confirmed by NMR and MALDI TOF-MS spectra.

諸言

シクロデキストリン (Cyclodextrin; CyD) は、中央に疎 水性空洞を有する環状オリゴ糖で、構成グルコース数が 6~8 個のものが、それぞれ α-、β-、γ-CyD として知られて いる¹⁾。その空洞の大きさに応じた分子をゲスト分子とし て包接するが、ゲスト分子の安定化や水溶化をもたらし、 食品、医薬品から機能性材料に至るまで、多様な分野で応 用展開されている²⁾。天然 CyD および糖分岐 CyD は酵素 法で工業生産されているが、これ以外にもさまざまな誘導 体が、有機合成化学を駆使して合成されている。

一方、CyD 同様にグルコースを構成単位とする環状イソ マルトオリゴ糖 (cycloisomaltooligosaccharide; CI) はシク ロデキストラン; cyclodextran)とも呼ばれ CyD 同様機能発 現が期待されている⁴⁻⁵⁾。しかしながら、グルコースの 2 位から分岐を有する分岐シクロデキストランが酵素を用 いて合成⁶⁾されているだけで、化学修飾の報告はない。上 記分岐 CI はフラーレン包接作用を有することが報告され ており、CI 化学修飾により有機溶媒可溶化や発色団の導入 による分離精製法開発の可能性もある。 当研究室では、これまで種々の化学修飾 CyD を合成し てきた⁷⁻¹⁷⁾。本論文では CI が二級水酸基のみ有する点に着 目し、グルコース残基 7~9 の CI (CI-7, CI-8, CI-9) および 7~17 の混合物である CI-plus について一般的糖水酸基保護 基である全ベンジル化を行った (Scheme, Figure 1)。さら に、NMR を基にした構造解析結果を CyD と比較し報告す る。

実験および方法

試薬 溶媒、試薬は特級またはそれに準ずるものを使 用した。CI は株式会社シー・アイ・バイオ製を使用した。 CI-7、CI-8、 CI-9、CI-10 は純度 95%以上(HPLC)であ る。CI-plus の NMR スペクトルと MALDI TOF-MS スペク トルをそれぞれ Figure 3 および Figure 4 に示した。

機器 NMR は JEOL NM-LA500 を用いて 5 mm 試料管 で測定した。標準的には約 5 mg の CI を重水(ALDRICH 99.9 atom%)0.75 ml に溶かし、30.0℃で測定した。生成物 は重クロロホルム¹H 核では 32 回、¹³C 核では 4400 回積算 した。MALDI TOF-MS は Applied Biosystem 社製 Voyager DE Pro-T を用いて、2,5-dihydroxybenzoic acid(DHB)をマ トリックスとし測定した。



Scheme. Reaction between CI and benzyl bromide.



Figure 1. Molecular structures of CI-10 and Bn₃₀CI-10.



Figure 2.



Figure 3. MALDI TOF-MS of CI-plus.

合成 Bn₂₁CI-7

CI-7 (15.0 mg/0.013 mmol)を乾燥 N,N-ジメチルホルムア ミド (DMF) 1 ml に溶解し、水素化ナトリウム (NaH; 28.0 mg/1.16 mmol)存在下、ベンジルブロミドを加え、3日間 反応させた。MALDI TOF-MS で生成物のピークの存在を 確認したのち、メタノールを添加し反応を停止させた。酢

酸エチルで抽出し、無水硫酸ナトリウムで乾燥させた。 Merck 製分取用シリカゲル 60 F254 にて、 ヘキサン: 酢酸 エチル=2:1 v/vを展開溶媒として常法に従い精製し、油状 物 Bn₂₁CI-7 (10.4 mg、収率 26%)を得た。¹H NMR (500 MHz, CDCl₃, ppm): δ 3.28 (*dd*, 7H, H2), δ 3.60-3.72 (*m*, 28H, H5, H6, H4, H6'), δ 3.87 (t, 7H, H3), δ 4.45 (q, 14H, CH₂Ph), δ 4.64 (q, 14H, CH₂Ph), δ 4.79 (d, 14H, CH₂Ph), δ 4.90 (d, 7H, H1), δ 7.08-7.20 (m, 105H, Ph), MALDI TOF-MS: m/z Calcd. for C₁₈₉H₁₉₆O₃₅Na⁺: 3048.34; Found 3046.46.

Bn₂₄CI-8

CI-8 (15.0 mg/0.012 mmol)を乾燥 DMF 1 ml に溶解し、 NaH (27.0 mg/1.12 mmol)存在下、ベンジルブロミドを加 え、Bn₂₁CI-7と同様にして反応、精製をし、油状物 Bn₂₄CI-8 (12.4 mg、収率 31%) を得た。¹H NMR (500 MHz, CDCl₃, ppm): δ 3.26 (dd, 8H, H2), δ 3.55-3.74 (m, 32H, H5, H6, H4, H6'), δ 3.86 (t, 8H, H3), δ 4.42 (q, 17H, CH₂Ph), δ 4.66 (q, 17H, CH₂Ph), δ 4.83 (q, 17H, CH₂Ph), δ 4.87 (d, 8H, H1), δ 7.04-7.23 (m, 122H, Ph), MALDI TOF-MS: m/z Calcd. for C₂₁₆H₂₂₄O₄₀Na⁺: 3480.54; Found 3476.69.

<u>Bn₂₇CI-9</u>

CI-9 (15.0 mg/0.010 mmol) を乾燥 DMF 1 ml に溶解し、 NaH (27.2 mg/1.13 mmol)存在下、Bn₂₁CI-7、Bn₂₄CI-8と同 様にして反応、精製をし、油状物 Bn27CI-9(19.4 mg、収率 48%) を得た。¹H NMR (500 MHz, CDCl₃, ppm): δ 3.25 (*dd*, 9H, H2), δ 3.59 (*d*, 9H, H6) δ 3.64-3.76 (*m*, 27H, H5, H4, H6'), δ 3.86 (t, 9H, H3), δ 4.41 (q, 19H, CH₂Ph), δ 4.63 (q, 19H, CH₂Ph), δ 4.82 (q,19H, CH₂Ph), δ 4.89 (d, 9H, H1), δ 7.05-7.20 (m, 136H, Ph), MALDI TOF-MS: m/z Calcd. for C₂₄₃H₂₅₂O₄₅Na⁺: 3912.73; Found 3908.03.

結果と考察

CI-7、CI-8、CI-9 をそれぞれ乾燥 DMF に溶解し、氷浴 中、NaH存在下、ベンジルブロミドと室温で3日反応させ、 収率 26, 31, 48% で目的の化合物を得た。MALDI TOF-MS によると、それぞれ 3046.46, 3476.69, 3908.03 のピークを 観測し、これはそれぞれの理論値に Na⁺を加えた分子量 [M+Na⁺]=3048.34, 3480.54, 3912.73 とほぼ一致した。さらに、 ¹H NMR において、芳香族プロトン、メチレン基由来のシ グナルが、7.0-7.25 および 4.3-4.2 ppm に、5:2 の積分比で、 3.4-4.0, 5.0 ppm に CI 構成グルコース残基由来のシグナル が観測され、積分比よりグルコース残基とベンジル基の比 は1:3 であることが確認された (Figure 2)。以上より、構 成グルコースの 2, 3, 4 位水酸基がすべてベンジル化した CI、すなわち Bn₂₁CI-7、Bn₂₄CI-8、Bn₂₇CI-9の合成が達成 された。生成物はすべて油状であった。CI-10に関しては、 試料が少なく、合成実験を行うことができなかった。構成 グルコース数 7-17の CI および直鎖オリゴイソマルトース の混合物である CI-plus を用い、同様に処理した。反応は 進行したが全ての水酸基をベンジル化することはできな かった。混在している直鎖状イソマルトースのアノメリッ ク位置の水酸基の反応性が異なるので、この水酸基が残存



Figure 4. 500MHz NMR spectra of $Bn_{21}CI-7$, $Bn_{24}CI-8$, and $Bn_{27}CI-9$ in CDCl₃; A part of glucopyranoside unit are indicated upper side with assignments.

し、精製分離も不可能であったと推測している。CI-plus の全ベンジル化および分離精製法についてはさらなる検 討が必要であり、研究を進めている。

謝辞

本研究の機会を与えていただきました日新精糖株式会社に深く感謝いたします。

参考文献

- M. L. Bender, M. Komiyama, *Cyclodextrin Chemistry*, Springer-Verlag, New York, **1978**.
- ナノマテリアルシクロデキストリン, 日本シクロデキ ストリン学会 編, 米田出版 2005.
- 3) 舟根和美「シクロデキストラン」p205-210 早川幸男、中 久喜輝夫編「オリゴ糖の製法開発と食品への応用」シー エムシー出版 東京 2012.
- C.-Y. Jina, D.-D. Zhang, T. Oguma, S.-X. Qian, J. Incl. Phenomn. Macrocyl. Chem., 1996, 24, 301-310.
- K. Funane, K. Terasawa, Y. Mizuno, H. Ono, S. Gibu, T. Tokashiki, Y. Kawabata, Y. M. Kim, A. Kimura, M. Kobayashi, *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 2008, 72, 3277-3280.
- T. Oguma, H. Kawamoto, *Trends Glycosci. Glycotechnol.*, 15, 91-99, 2003.

- K. Takahashi, K. Hattori, F. Toda, *Tetrahedron Lett.*, 25, 3331-3334, 1984.
- 8) K. Takahashi, K. Hattori, J. Incl. Phenomn., 2, 661-667 1984.
- K. Takahashi, Y. Ohtsuka, S. Nakada, K.Hattori, J. Incl. Phenomn., 10, 63 -68 1991.
- M. Akiyama, A. Kato, J. Kato, K. Takahashi, K. Hattori, *Chem. Lett.*, **1991**, 1189-1192.
- 11) K. Takahashi, Bull. Chem. Soc. Jpn. 66, 540-544, 1993.
- M. A. Hossain, K. Hamasaki, K. Takahashi, H. Mihara, A. Ueno, J. Am. Chem. Soc.123,7435-7436 2001.
- I. Suzuki, Y. Kato, Y. Egawa, J. Anzai, M. Wadamori, H. Yokomizo, K. Takahashi, J. Mol. Struct., 602-603, 223-231, 2002.
- K. Takahashi, H. Narita, M. Oh-hashi, A. Yokoyama and T. Yokozawa, J. Incl. Phenomn, Macrocyl. Chem., 50, 121-127, 2004.
- T. Yamanoi, N. Kobayashi, K. Takahashi, K. Hattori, *Lett. Drug Design & Discovery*, 3,188-191 2006.
- Y. Oda, N. Kobayashi, T. Yamanoi, K. Katsuraya, K. Takahashi, K. Hattori, *Medicinal Chem.*, *4*, 244-245, 2008.
- S. Fujiwara, K. Takahashi, Supramol. Chem., 23, 156-159, 2011.